

第2部あとがき

Postscript

下地 秀樹

SHIMOJI Hideki

ここに刊行する本誌は、従来の慣用名に従えば電子ジャーナル版『総合人間学』第11号第2部である。肝心のHP上では、電子ジャーナルではなくオンラインジャーナルと明記してきたので、ここまで名称の齟齬、混乱があった。そこで、本年3月に運営委員会の議を経て、誌名をオンラインジャーナル『総合人間学研究』にあらため、以後はこれを正式採用することになった。本誌はその最初のお披露目であり、通算号数はそのまま継承し、オンラインジャーナル『総合人間学研究』第11号第2部ということになる。

機関誌『総合人間学』（書籍）とは別に、オンラインジャーナル（電子ジャーナル）『総合人間学』の刊行（公開）がはじまったのは2013年度、第7号からで、すでに5年度目を終えようとしている。昨号（第10号）で予告したように、本学会創立10周年を区切りとして、書籍とオンラインジャーナルの編集を区別し、書籍とほぼ同内容のオンラインジャーナル第1部は刊行しないことにした。そのかわり、電子媒体としての特性を生かし、書籍のベースとなる大会メインシンポジウム以外の本学会の諸企画をいくらかでも速報する試みとして、年複数回の刊行を旨とした。企画者側の条件が整えば、従来の本体以外に別冊を編集、刊行するというのである。

すでに本年1月末には最初の別冊として、第11

号第1部を刊行し、第11回大会（2016年5月21日、22日、於・國學院大学渋谷キャンパス）の「学会10周年記念フォーラム：この10年の試みから総合人間学における〈総合〉を問う」の諸報告と、「若手シンポジウム：〈病〉から考える社会と人間」の諸報告を収めた。本年2月25日には、上記「記念フォーラム」の延長戦ともいべき研究会が開催され、第11号第1部の諸報告を読んだ上で参加した会員がいたので、別冊刊行の意義はあったと思われる。編集委員会としては、今後も本学会の諸企画からの情報発信を重ね、会員間の継続的な研究交流に資するよう、可能な限り年複数回刊行を試みたいと考えている。

この第1部に続く本誌、第11号第2部はほぼ従来のオンライン（電子）ジャーナル第2部の構成を踏襲している。

まず、寄稿論考を4本掲載した。〈総合人間学の課題と方法〉はオンラインジャーナルの中心的テーマとして、継続的に論考を重ねていく予定で、今号では三浦永光会員に「現代社会とその人間観—総合人間学のための試論」を寄稿していただいた。本論は、まず人間存在の根本条件を詳細かつ的確に整理し、これと現代の危機との関連性を解明しながら、この危機を克服する道筋を模索する労作で、副題に示されているように、ここから今後の議論の拠り所を得ることができるだろう。

この他に〈研究動向〉欄を設け、本学会内の自発的研究会を含む諸研究企画から寄稿していただいた。

岩田好宏会員の「里動物と代替環境をめぐって」は、本学会では「自己家畜化研究会」などで報告されてきたことをもとにした論考で（例えば、昨年8月20日（土）の同研究会第7回会合における「自然淘汰・人為淘汰と自己家畜化との関係」）、人間と他の生物との関係に関する同会員の長年にわたる研究成果が簡潔に整理されている。自然、環境のなかの人間について、生物の豊富な観察事実から再考する視点が与えられる力作である。

木下康光会員の「総合人間学的老年論（序説）」は、昨年7月9日（土）に行われた本学会関西西部会談話会での同会員の報告「総合人間学的老年論」をもとに、現代社会だからこそ老年論が学際的、総合人間学的探求テーマであることを、様々な哲学書や文学作品を辿り、古来よりの老年に関する英知を振り返りながら訴えている。本学会では若手シンポジウムでも〈老〉がテーマとなることがあったが、古希を迎えた同会員ならではの考察が行われている。本学会には運営委員会の企画による研究会や談話会とは別に、自発的な研究会として前記の「自己家畜論研究会」と堀尾会長の呼びかけによる「戦争と平和の問題を総合人間学的に考える研究会」がある。昨年11月12日（土）の後者の第7回会合では、文学評論家の新船海三郎氏を招き、氏の近著『戦争は殺すことから始まった一日本文学と加害の諸相』に関する講演と討議が行われた。穴見慎一会員の「日本文学と戦争—新船海三郎『戦争は殺すことから始まった一日本文学と加害の諸相』を読む」は、この会合をもとに、同会員があらためてこの作品を読み解き、戦争と平和を総合人間学的に考えることの意義を探り当てようとした論考である。

以上の寄稿論考は、いずれも本学会内の企画をもとにしたもので、その詳細について当日足を運べなかった会員の参考に供するとともに、オンラインジャーナルとして本学会の外にも本学会の活動を知らせることに資するはずである。編集委員会としては、今後もこのような論考の掲載を続け、第1部と合わせて、学会内の研究的資源を発信していきたいと考えている。

今号での一般研究論文の掲載は、ご覧のように若手の会員による2本にとどまった。そもそも投稿が例年よりかなり少なかった。投稿規程を若干手直しし、さらに会員諸氏の活発な投稿を促す方策を、運営委員会等で継続的に検討しているところである。

最後に、本誌の編集にあたり、本学会幹事（編集担当）の岩村祐希氏、本学会HP管理担当の吉田健彦氏にご尽力いただき、またアルバイトとして鈴木朋子氏のご助力をいただいた。ここに記して、心からの感謝の意を表したい。

[しもじ ひでき／立教大学／教育学]